

ナシ



(10アール当り)

時期	方法	資材と施用法
礼肥 [収穫前～直後]	樹勢・根の 早急な回復	●根っ酵素3～5ℓを適宜薄めて灌水(300倍) または500倍で葉面散布(葉が薄く傷んでいる場合) ※樹勢と地力があれば酵素液だけで。もしチッソ切れなら硫安20kgを散布。(または速効性の肥料20kg)
秋肥(元肥) [10～11月、落葉前]	1年分の基本となる土作り、樹体の基礎体力を作る栄養の供給	●ラクトバチルス600g ●堆厩肥(牛糞など)1トン以上または米ヌカ150kg 硫安60kg ※複合有機肥料を使う場合はチッソ成分12kgとする。 堆厩肥が鶏糞等で、チッソ成分が多い場合、硫安を減らす。 ※堆厩肥・有機物が不十分な場合は硫酸カリ20kgを追加。 ●畑の大将<青>40～80kg ※カルシウムをしっかり効かせて土作りをする。 ※土壌pHを測定して、酸性の中和に必要な分量の畑の大将<青>を施用。春～夏にも同様の調節をする事。 ●マンゾク粒状50kg →根から樹勢を強くする。モンバなどで衰えた樹も回復。 ※上記5種を同時に施して、耕す。(土と軽く混ぜる) 施肥位置は樹の近くだけでなく、園全体に広く全面散布。 ※秋肥(元肥)の一部は落葉時に動く根に吸収され、大部分は冬期を通じ土壌微生物により醗酵状態にされて、春から吸収される。
春肥 [2月、地温上昇前]	春の花と葉・枝に栄養分を供給	●硫安20～30kg ●畑の大将<青>20～40kg ※根が動き出す前に、春先からの花と葉・枝の栄養を施用。 ※チッソのみが効き過ぎてカルシウムが足りないと、花の受粉・着果・初期の果実形成に支障がある。花の前にしっかりカルシウムを効かせる事。 ※秋肥に充分施用した場合は、春の施用は少なめに。 もし秋肥時に投入していなければ、春、ラクトバチルスも施用。
[5～7月] 肥大中の葉面散布	初期の肥大促進、樹勢維持	●根っ酵素500倍液または3リットル灌水(着果後～袋掛け時) ※ピンポン玉大の頃、状態によっては硫安20～30kgも散布。
	果実肥大、樹勢維持	●根っ酵素500倍液
	葉を厚く、黒斑防止	●花咲くCa液500倍
[6月] 玉肥	初期肥大	●根っ酵素3～5ℓを灌水(5月始め)
	果実肥大と、樹勢の維持(花芽分化の正常化)	●硫安20～30kg ●畑の大将<青>20～30kg ※梅雨期の果実肥大と樹勢維持にはチッソ肥料を与える。しかしチッソ過多にせず、栄養バランスを健康に保ち、厚い葉で、黒斑病も少なくするにはカルシウム施用が大事。 ※土壌EC:0.2以下(硫安施用後0.4迄)、葉中チッソ3.7%前後の範囲内で、状態によりチッソとカルシウム量を調節する。 ※特にチッソとカルシウムを多量に施す場合は、20kgずつ2回(15日間隔)に分施するのが効果的。
[6月末～7月] 収穫40日前	果実の品質向上	●畑の大将<青>20～40kg ※土壌pH:6.5以上と高い場合は田畑の大将<赤>を施す。 ※6月に十分なカルシウムを施用し、効いていれば不要。
収穫20日前	果実の肥大	●硫安20kg(状態を見て) ※または根っ酵素液3ℓを灌水か、葉面散布。

※モンバ病の対策=軽い場合は、随時、マンゾク・粒状50kg(1本当り2kg)を散布する。ひどい場合は、まず根を掘って根っ酵素(1本当り)1ℓを100倍に薄めて灌注し、根を洗う。3～4日後、ラクトバチルス30gを米ヌカ7kgに混ぜて、散布し覆土する。その後7日ごとに2回、根っ酵素液300倍の灌注をする。